

I氏は職務がら、梅雨期の筑後川流域の雨量観測所を巡視する機会を得た。以下記すことは、その間に拾った雨量計異聞である。

第一話 調整棒

調整棒などという言葉は聞くとも旧海軍の精神棒を想起される人があるかも知れない。しかし何のことはない、ガラス棒である。自記雨量計の雨水がたまる円筒の容積の誤差を修正するため、導水管の中に入れられたガラス棒である。両者が似ているとすれば誤りを正す点であろう。

雨量計が故障しているので分解する。ところが普通あるべきはずのガラス棒が1本も入っていない。係の人に聞くと、“どうも変なもの、変なところに入っている。温度計のこわれたのや、ガラス棒など6本も詰めこんである。困ったいたずらをする奴があるもんだ。棄てちまえ”。ということで、その存在する理由を説明すると“なるほど”と合点がいったが、I氏の方も“なるほど”と感心。

温度計の端片れではねえ。

しかしI氏は、委託観測所では調整棒以前の問題があると思っている。

第二話 氷の力

川幅はしだいに狭くなり、流れは急で岩をかむ上流になると、南国の6月も肌寒い。

雨量計の受水口から水を徐々に入れて良否を検定する。いくら水を入れても一向にペンは記録しない。浮きの心棒の摩擦も大したことはない。こんな時は必ずといっていいほど、浮きが破裂して水が入っている。このような山間部では冬季の最低気温は当然零下数度ないし十数度まで下り、静止している水は完全に凍結する。暖房装置のない自記雨量計を屋外に放置すれば、内部の水は凍結し、凍結する時急に体積を増すので、その圧力は円筒内部で最も構造の弱い浮きにかかって、ついに浮きを破壊することになる。

したがって、山岳地帯の測候所では自記雨量計による観測は中止する。

浮きの破裂は平地でも認められ、巡回コースに5、6個所もあった。

雨量計余話

今山正春

これは委託者の心なき不注意である。浮きの破裂とは別に、同じくペンが作動しない場合に、浮きの心棒の亀裂がある。こんな器械では、たいてい气象台の検定証もなく、各製品のメーカーもちがった、寄せ集め細工の粗悪品である。したがって値段も安く売りこんだものであろう。これは業者の心なき悪徳である。

第三話 科学する心

ある高等学校の自記雨量計である。I氏は一目みて、これはいやにサイフォンの位置が高いぞと思った。それほど普通に較べて高いのである。ほとんど円筒すれすれの高さであり、サイフォンの口金は大部分露出している。よく見ると検定した時のラインはずっと上に刻んである。

これでは当然20耗以上降らないとサイフォンは働かないはずだと、例によって受水口から水を入れてやる。すると案に相違して20耗になると見事にサイフォンは作動してペンはゼロ線にもどる。してみると円筒の作り方がよほど規格外になる訳だが、検定証はあるし、サイフォンの口金にも検定ラインが付いている。とにかく、開けてみようということになって分解し、円筒内部をのぞいてみると驚いた。何とその底部には小さい玉砂利が敷き詰められているではないか。取り出してみると二十数個。ここにおいてI氏の疑問は氷解した。

すなわち、こうである。

この学校の気象の担当は物理の先生である。自記雨量計が到着し、設置された時、この先生の外に生徒達も見学していたであろう。適当にサイフォンが挿入され、さて水を入れてみると自記紙一ぱいの高さ20耗になってもサイフォンは働かない。生徒は見ている。先生の英智は瞬間的にこの問題を解決せねばならない。それには20耗で作動するように円筒の容積を小さくすればよろしい、と考えて生徒達に講釈しておご

そかに玉砂利を敷き給うたのであろう。

サイフォンの高さを下げ、ることを考えずに水位を上げる思い付きがおもしろい。科学する心である。

この実験はI氏に一つの教訓を与えているように思われた。“河床隆起すれば水位上昇して洪水となる”。

第四話 虫魂よ永遠に

筑紫次郎が緩下するところ、穀倉筑後平野が開けて、I氏が訪ずれた中学校はその田園に囲まれている。

今度の雨量計は第三話の場合とは逆に、サイフォンが早く利きすぎ、17耗くらいで水が落ちる。器械の調子はいいし、サイフォンの高さも検定の線と一致している。それで3耗の差とはひどすぎる。どうも不思議である。ネヂをはずし、浮きを取り出すと、円筒の底に何かエタイの知れぬものが沈下している。取り出そうと思ひ、つかみ上げた途端、不気味な感触が全身を走った。虫だ！青虫だ、I氏の最もいみ嫌う青虫だったのである。勘定してみると40匹あまりで、水位が上昇するのも無理はない。無理はないが、不可解なのは円筒水底の青虫であり、彼等の存在理由でなければならぬ。

この難問も、I氏の勘と、現地検証、聞きこみにより程なく解決。

これは春に浮かされた虫たちの、いたましい死の暗夜行路である。

四月ともなると人間のみならず、誰でも浮かれたくもなろうというもの、彼等は大好物のキャベツも喰い飽きたか、運動がてらの散歩に出かける。どこぞおもしろいところはないかと見廻すと、おなじみの校庭に異様な物見楼みたいなものが立っている。高見の見物とシャレる気になったのも無理はない。ゾロゾロよじ登り、受水口の縁に立った時は、得意満面、顔をもたげて四冊を見渡したであろう。それで止めればよかったものの、甕の淵は幼いものの冒険心をそそり、彼等は漏斗状の淵を下り、さらに暗黒のトンネル(導水ゴム管)へと進んで行った。このトンネルこそ後退することの出来ぬ死への引導であり、待ち構えていた水面は、次から次に幼い命を呑んでいったのである。(福岡管区気象台)